

My Place, My Art 展

～私とアートの在るところ～ 2026.8.15 Sat – 8.30 Sun

出展作家プロフィール

3 内山 翔二郎 Shojiro Uchiyama

1984 年 神奈川県相模原市生まれ / 2010 年 日本大学大学院藝術学研究所造形芸術専攻博士前期課程彫刻分野 修了 / 2013 年 第 16 回岡本太郎現代芸術賞 特別賞受賞 / 2024 年 第 17 回大分アジア彫刻展 優秀賞受賞

■ステートメント
私はこれまで、昆虫や植物などをモチーフとしながら、生命と物質の境界に関する彫刻制作を行ってきた。近年では、人間の記憶、戦争、民俗、死生観に関する彫刻表現へと関心を広げ、主に鉄を素材として用いながら、腐食や重量感を伴う物質性を通して、歴史の痕跡や時間の堆積を可視化することを試みている。



7 金子 まゆみ Mayumi Kaneko

1974 年 京都出身 / 1997 年 沖縄県立芸術大学陶芸コース 卒業 / 2000 年 富山ガラス造形研究所造形科卒業 / 2000～2002 年 倉敷芸術科学大学ガラスコース実習補佐 / 2003 年 香川県にガラス工房グラストイム設立 / 工芸都市高岡 2008 クラフトコンペ優秀賞

■ステートメント
ガラスは存在そのものが美しい素材です。皆様が思い描くガラスのイメージは様々あると思いますが、私が手を加えることによってできた作品でまた違ったガラスの魅力を感じてもらいたいです。



11 齋藤 悠奈 Yuna Saito

2020 年 愛知県立芸術大学陶磁専攻 卒業 / 2023 年 ソウル科学技術大学大学院陶芸学科 修了。土と水の関係性をテーマに、浸透現象を用いた陶作品を制作。2025 年 SICF26 MARKET 部門水室友里賞、2023 年 LEXUS CREATIVE MASTERS AWARD ファイナリスト。

■ステートメント
私は、土と水が出会い、浸透し、残していく痕跡を手がかりに制作しています。水はやがて失われますが、その移動の軌跡は土の中に静かに刻まれ、新たな風景となって立ち現れます。自然現象と素材の性質、そして偶然と時間が織りなす変化を受け止めながら、人為と自然の境界に生まれる景色を探求しています。



4 遠藤 章子 Shoko Endo

1985 年 新潟県三条市生まれ / 2012 年 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻博士前期課程 修了。現在は茨城県の自宅アトリエにて電気炉を用いた铸造技法（キルンキャストینگ）でオブジェを中心に制作している。

■ステートメント
ガラスという素材そのものの持つ美しさや铸造技法でうまれる質感を生かしながら、「ただそこにあるだけ」というような静かでおおらかなたたや、ふれようとして手を伸ばす心の機微を受け容れるかたちを作りたいてと考えている。



8 川合 朋郎 Tomoro Kawai

1976 年 大阪生まれ / 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻首席卒業。
同大学院修了（中西夏之教室）在学中より個展を中心に国内外で作品を発表している。

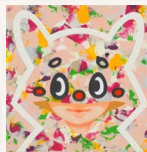
■ステートメント
藝術とはわからないものがあるということを知る術ではないだろうか。この世はおおよそ知覚できないもので成り立っている。自分本意に理解を急ぐと本当ではない答えを出してしまう。わからないなりに漠然と曖昧な状態を眺めることが知るこの始まりだと思う。



12 榎 貴美 Kimi Sakaki

1983 年 和歌山県生まれ / 2010 年 東京造形大学造形学部美術学科 卒業 / 2012 年 同大学大学院 修了。個人としての作品発表と並行し、2012 年にクリエイティブユニット S+N laboratory を結成。2019 年には「作品集『KIMISAKAKI twinkle』」を出版。同時期に佐藤美術館での展覧会開催、さらさらちゃんシリーズのスタート。2023 年個展「このくらやみのなか」より Little シリーズを展開。

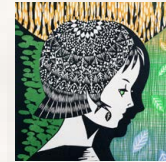
■ステートメント
「こども」という存在（アイコン）を、様々な事物とともに、表現の器、鏡のような装置として描く。



1 池田 実穂 Miho Ikeda

1978 年 群馬県生まれ / 2003 年 東京学芸大学大学院美術科修了 / 2004 年 イタリア・カッラーラ・アカデミア彫刻科留学（2009 年 卒業） / 2021 年 帰国、群馬県沼田市にアトリエを構え初代ヌマタ・アート・アンバサダーに就任

■ステートメント
多版多色刷りの木版画の技法を用いて、自然の情景や、生き物、少女などをモチーフに、抒情的な世界観を色彩豊かに表現する。大胆で動きのある構図の中にグラデーションや緻密な幾何学模様なども取り入れながら、リズム感と奥行きのある独自の世界を構築したい。



5 岡部 稔 Minoru Okabe

1962 年 静岡県三島市生まれ 三島市在住。2001 年より静岡を中心に東京、神奈川、京都などで個展を開催。
時間と環境の作用を受けたモノに意識とレンズを向け、ファウンド・オブジェの手法で作品を制作。

■ステートメント
「景色から気色へ、具象から抽象へ」それは、カメラの力を借り、意味や必要性から解放された色と形だけの抽象的世界を模索する試みです。



9 河本 蓮大朗 Rentaro Kawamoto

1991 年 生まれ / 2017 年横浜美術大学彫刻コース研究生修了。織物の制作を中心に、裂き織りの技術を用い、古布などの既製品を新たな布へと再構築する作品を制作。

■ステートメント
「織物で見立てる」という考えのもと、布を絵として捉え直す試みを行っているシリーズ。裂き織りによって織られた布は、絵画のような色面や構図を持ちながらも、近づくとき糸の厚みや柔らかさ、素材感といった織物固有の性質を隠しきれない。絵画になろうとする布は、イメージとして立ち上がろうとしながら、同時に物質としての存在へと引き戻される。その違いの狭間で、布が「絵になる」瞬間を模索している。



13 佐々木 光 Hikaru Sasaki

1991 年 岩手県生まれ / 2014 年 京都造形芸術大学美術工芸学科 卒業 / 2018 年 富山ガラス造形研究所研究科修了 / 2020 年 Jutta Cuny Franz Award 2020 準グランプリ / 2025 年 工芸都市高岡クラフト展 入選 / 2026 年 現代ガラス展 in 山陽小野田 入選

■ステートメント
吹きガラス技法を用いて、身体的パフォーマンスから展開したアートワークや複数の色ガラスを 1 つの生地に織り込んだオリジナルの色ガラスを用いて、複雑な色模様を映し出すうつわを制作しています。



2 伊藤 博敏 Hirotoshi Itoh

1958 年 長野県生まれ / 1982 年 東京藝術大学美術学部工芸科卒業 / 1987 年 アトリエヌーボーコンベ審査員賞 / 1995 年 第 2 回トリックアートコンベ優秀賞。家業の石材店を営みながら石をベースに異素材を組み合わせた作品を制作。国内外で個展を中心に作品を発表。

■ステートメント
石材店に生まれた私は、大学では金属加工を学びながら石を使った表現を模索していた。卒業後、石の持つ素材感を活かす方法として「ミタテ」という日本古来の概念を利用することを思いつき、今のスタイルとなる。



6 OJIYU

1992 年 愛知県生まれ / 多摩美術大学絵画学科版画専攻 卒業 / 2023 年 ザ・チョイス年度賞入賞、ヨロコビ to 公募展ライフアートアワード 準大賞 / 2025 年 第 20 回 TIS 公募入選。

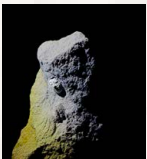
■ステートメント
" ヒト "、それになつわる " 生活 " を、現代のアーカイブを残すように、プリミティブに表現。観測者であり当事者。そこにボーダーはなく、生きるから生じる苦しさや、喜びや、言語化できない感情集積をカタチにする。



10 齋木 三男 Mitsuo Saiki

石屋、石工、彫刻家
1975 年群馬県生まれ。伝統的な手彫りでの石彫を基本に、石仏やモニュメントを制作。2014 年、群馬県石材組合創立 50 周年記念事業として「くんまちゃん」の石像を制作。一般石材施工技能士。

■ステートメント
私にできるのは石を彫ること。硬いけど柔らかく、冷たいけど温もりを感じる素材。長い時間を閉じ込めた石。地球のかけらが土に帰る途中、石ころを眺めているとあらわれてくる、石の記憶に眠る仏さまを呼び起こす日々です。



14 白砂 勝敏 Katsutoshi Shirasuna

20 代前半に人生は一度きりだから、やりたいことのみやると決め、ターザンになるべくジャングルで数か月過ごす。だがアイスが食べたいという思いに逆らえず挫折。35 歳の時に初めて行った美術館で声をかけられ個展を企画して頂きそのままアートが生業になる。

■ステートメント
自然界に溶け込むような生活を続けていると、自ずと石や木や水や生き物へ興味が向かう。私は自然の摂理を体感する事で、自然界に抗えない大きな力を感じ、それに同調し自らの力を開放する事覚えた。アートと出逢い、そういった感覚を取り入れながらの作品制作にのめり込んでいった。私は言葉になる前の衝動を具現化している。



15 鈴木 生 Sei Suzuki

1984 年 静岡県生まれ / 2013 年 東京藝術大学大学院 鋤金専攻 修了。同大学卒業・修了作品展 藝大美術館・東京都知事賞 受賞。モニュメント：狩野川記念公園（伊豆市）パブリックコレクション：株式会社日本ビット（大分市）

SNS



■ステートメント
「始まりのかたち」と「繋がり」をテーマに制作しています。世界が抱える様々な問題を乗り越え未来へと進んでいくには人々が支え合い共に歩むことが必要です。異なる対照的な素材を用いた作品は互いに個性を持ちながらも共に存在することで深みを増していく関係性を象徴しています。



19 長野 順子 Junko Nagano

1966 年 群馬県生まれ / 1989 年 東京藝術大学美術学部建築科 卒業 / 1991 年 東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻 修了。5 年間の建築設計事務所勤務の後、銅版画を学ぶ。1998 年 世田谷区民ギャラリーでの初個展、以降国内各地で個展を開催。

SNS



■ステートメント
自然豊かな山村に生まれ育ち、野生の動植物の生命力の逞しさと美しさに刺激を受け、この感動を表現したいという衝動が私を創作の世界へと導きました。幼い頃から心に描く空想の物語を、モノクロームの銅版画という表現方法を用いて、光と影で織りなされる幻想世界として描いています。



23 福井山 Fukuiyama

造形作家 福井揚と、画家 横井山泰によるユニット

SNS



■ステートメント
福井によるテラコッタの花瓶に横井山がアクリルで絵付けをした作品です。それぞれの作品には表と裏に絵付けがされています。例えば猫と犬。



27 横井山 泰 Yokoiyama Yasushi

1976 年 静岡県伊豆の国市生まれ / 2001 年 多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻 卒業 / 2003 年 多摩美術大学大学院美術研究科油画専攻 修了 / 2003 年「TAMA・デ・アート」奨励賞 / 2004 年「第 7 回岡本太郎記念現代芸術大賞展」特別賞 / 2005 年「シェル美術賞 2005」本江邦夫審査員奨励賞 / 2010 年 文化

SNS



■ステートメント
アトリエに佇む愛犬に無常を感じ、動物の姿を借りて人間模様を描く。



16 高崎 紗弥香 Sayaka Takasaki

1982 年 東京都生まれ / 法政大学社会学部社会政策科学科 卒業。
主な個展に GALLERY エクリュの森（静岡）、MEDIA SHOP（京都）、寫屋書店（大阪）、六本木ヒルズクラブ（東京）。写真集に『沈黙の海へ』『巡礼』。パブリックコレクション：足利市立美術館、大岡信ことば館、PHOTO MUSEUM 沈黙の

SNS



■ステートメント
山を歩き身体に負荷がかかることで思考が止み、自身が空の器のような感覚になる。求めるのではなく、現れるものに感応しシャッターを切る。出会った瞬間に与えられた恩恵を、そのまま差し出すような思いで作品を作っていく。



20 那須 勲 Isao Nasu

宝珠悉皆師／アーティスト。「神話的世界観」と「工芸の美」を融合した装身具やモニュメントを国内外で発表。阪急うめた本店美術画廊での個展、京都・閑臥庵への寺宝納品など実績多数。



■ステートメント
世界の陰影とも言える平安と混沌を巡る中で、様々なものが私の中で壊され創られていった。「好き」の感情の発露が石だった事から、10 万年程前より始まった身に纏う行為が人類の象徴行為の起源であり、意識の覚醒を促すスイッチだった事を知った。作品は数多の工芸職人の指先にある祈りにも似た静寂と聖性が宿っている。作品に触れ、人生を創造するスイッチと出会って頂けたらと幸いです。

SNS



24 夕映えてシアン glowingred in cyan

芸術家・画家・ライブペインター。青森県出身、神奈川県在住。2011 年に筑波大学第三学群情報学類、2015 年にデジタルハリウッド東京本校 3DCG 映像アーティスト本科全日 2 年制を卒業した後、2017 年より作家活動を開始する。

SNS



■ステートメント
制作テーマは、「色彩と動きの表現に伴う、非言語思考と想起」。使用する配色や画題を決めずに、色彩感覚を頼りにした即興制作を行う。画面上に展開された色彩やストロークが、具体的な情景やモチーフに接続したタイミングで描画を止めるため、作品は自ずと抽象的な表現形態をとる。また、鑑賞体験を通じて、色に関する記憶の在り方および他者との共有性について問いかける。



28 李 元淑 Wonsuk Lee

2014 年 多摩美術大学大学院美術研究科博士後期課程 修了、博士号取得。日本、韓国、ドイツ、中国など各地で個展を開催。

■ステートメント
自然は私にとって単純な風景ではなく、人生を共にする仲間であり、インスピレーションの源です。その中で私は慰めと休息を得て、同時に強烈な生命力と創造的なエネルギーを発見します。私は自然との深い交感を通して人間と自然の共存、そしてその中に宿る美しさと崇高さを造形的な言語で表現したいと思います。

SNS



17 高松 明日香 Asuka Takamatsu

1984 年 香川生まれ / 2009 年 尾道市立立大学大学院美術研究科 修了。主な個展に 2026 年「はためく光 Fluttering Light／高松明日香展」三鷹市桜井浜江記念市民ギャラリー（東京）、2014 年岡山県新進美術家育成「I 氏賞」大賞受賞。2021 年「シェル美術賞展アーティスト・セレクション 2021」国立新美術館（東京）に選出される。2024 年「AM 倉敷 vol.17 高松明日香—光は世界を駆け巡る」大原美術館（岡山）を開催。現在、香川県在住。

SNS



■ステートメント
映画やインターネット上の画像に触発されながら、イメージをアクリル絵具で絵画に落とし込んでいる。



21 令佳 Haruka

陶器作家
2001 年 生まれ / 福島県会津本郷出身 / 東北芸術工科大学 陶芸専攻 卒業 / 多治見市陶磁器意匠研究所 卒業。

SNS



■ステートメント
何種類もの釉薬を重ねた、湿り合う表情が特徴の一点ものの器です。二つとして同じ模様はなく、すべての器が一期一会の個性を持っています。料理はもちろん、様々な使い方で生活に優しい特別感を与えるようなカラーリングを大切にしています。その時々運命の一つに会っていただけたらなと思っています。



25 吉岡 敦子 Atsuko Yoshioka

ファッション業界の専門職、人材の育成、会社経営を経て、創作活動始める。1995 年に東京藝術大学大学院修士課程 修了。1996 年～2010 年美術系大学にて非常勤、特別非常勤講師歴任。The Japan Contemporary Fiber Art Exhibition にアメリカ、ヨーロッパ各国美術館を5年間にわたり巡回展を行うなど、多分野にて活動。

■ステートメント
繊維素材と金属などの異種材料を使った独自技法で、空間に立ち上る立体群を構成した作品を制作発表している。自然界の法則に満ちた存在である森に対する畏敬の念をコンセプトに、その気配を追いかける制作で、詩的な空間構成を試みる。



29 和田 翔馬 Shoma Wada

1990 年 千葉県生まれ / 2014 年 多摩美術大学プロダクトデザイン専攻 卒業。木工の産地である北海道旭川に移住木の個性を最大限に活かした作品を展開している。

SNS



■ステートメント
樹が成長する上で必ず起こる、節や割れ、不揃いな木目。それらを欠点ではなく「生きてきた証」と捉え、そこにスポットライトを当てた作品。金属を使った独自の技法を、欠けている部分に施すことで、その部分が光り輝き「美しい個性」として生まれ変わる。画像は代表作の名刺入れ。欠けた部分が引き手として機能している。



18 長友 由紀 Yuki Nagatomo

2017 年 東京藝術大学 美術研究科工芸専攻染織領域 修了 / 東京藝術大学 サンドブランドン賞 / 2019 年 金沢卯辰山工芸工房 修了 / 第 10 回アダチ UKIYO E 大賞 優秀賞 / 2026 年 KAIKA TOKYO AWARD 2026 大賞

SNS



■ステートメント
友禅染めは、生地である絹の他、もち粉や米糠、海藻や大豆など日本に昔からある自然素材を用いています。大学で染織を学んだのち、加賀友禅の産地である金沢へ2年間移住。分業化されている友禅染めの工程を一人で完結できるようになりました。全工程を1人で行うことで、制約を受けることなく、失敗と実験を繰り返しながら新しい表現を目指しています。



22 Hiraco

1993 年 静岡県生まれ東京育ち / 2016 年 武蔵野美術大学建築学科 卒業。大学在学中から散歩中に写真を撮り始め、それらを元に2019 年からシルクスクリーンなどの版画作品制作を開始。

SNS



■ステートメント
建築空間分野のバックグラウンドがありながら、3Dではなく2Dとして建築物を捉え直しグラフィカルな表現を追求。モチーフはどこかに実在する風景をベースとし、ごく一般的な風景から見慣れない風景が現れる瞬間を切り取り作品にしている。一見パチャーと思えるようなものでもリアルに存在している事実があり、そこに希望のようなものを感じて作品を作っている。



26 吉永 ひな野 Hinano Yoshinaga

日々の生活の中で美しいと感じた木漏れ日や小さな芽吹き自然物の形などを元に制作しています。じっくりと時間をかけて石膏や粘土のかたまりを削ってかたづけります。暮らしををやらなく豊かにしてくれる作品を目指しています。

SNS



■ステートメント
磁器製のマトリョシカ。好きなこと、大切なことを思い出すためにひとつひとつの愛らしいマトリョシカの蓋を開けて覗いてみてください。



Bunkamura Gallery 8/